

詩と科学

宮岡 絵美

詩と科学。近いようで遠い、遠いようで近い。その関連のありようには、詩人や科学者を含む諸人の複雑な思いがある。物理学者の湯川秀樹は、次のようなエッセイを書き残している。

「そんなら一度失った詩は、もはや科学の世界にはもどって来ないのだろうか。詩というものは気まぐれなものである。ここにあるだろうと思つて一しようけんめいにさがしても、詩が見つかるとは限らないのである。ごみごみした実験室の片隅で、科学者はときどき思いがけなく詩を発見するのである。しろうと目にはちつとも面白くない数式の中に、専門家は目に見える花よりもずっと美しい自然の姿を、ありありとみとめ

るのである。しかし、すべての科学者がかくされた自然の詩に気がつくとは限らない。科学の奥底にふたたび自然の美を見出すことは、むしろ少数のすぐれた学者にだけ許された特権であるかもしれない。ただし幸いなことに、一人の人によつて見つげられた詩は、いくらでも多くの人にわけることができるのである。」

「詩と科学」湯川秀樹（『科学を生きる―湯川秀樹エッセイ集』〈河出書房新社・池内了編〉より）

かくされた自然の詩、それを追い求めるのが科学者なのかもしれない。引用の後半部分に少々意義をとなえろと、科学の奥底に自然の美を見出すことは、興味と意志がそこにあれば、普通の人でもできることだと思ふ。科学の発展の結果か、アウトリーチが充実した結果なのか、科学に美を見出すことは、湯川秀樹の時代よりは、もっと一般的な感覚になってきているのではないだろうか。自然本来の力強くも繊細な美だけではなく、メディアアートや映像技術などにより、高度に抽象化された科学のもたらす美を楽しむこともできるようになった。科学にはもちろん詩とはことなる部分もあり、理論的整合性や

新規性が必要とされる。それにもかかわらず、詩と科学には似通った部分がある。なぜなのだろうか。その疑問に明確に答えることは、わたしにはまだできないでいる。感性という言葉のみで説明するのは安易な気もするし、脳科学や認知科学をはじめとする諸分野の発展を汲むには時間と能力が足りない。気楽な駄文として、どうぞご容赦いただきたい。

さておき、詩も科学も自然の、この世界の表象である。そして詩は行間に多くの意味をくみとることができる。魅力的な数式群もまた、そのようなよみとり方をして楽しむことができるのかもしれないと思う。共通の理解が得られるように、厳密に書かれるのが科学論文であるから、そのようないわば文学的な読み方は邪道かもしれないのだが、数式で綴られた詩、いつかそんなものを書いてみたいとぼんやり思う。

詩と科学について考えたとき、いつも思い出すフレーズがある。有名なオマル・ハイヤーム『ルバイヤート』からの一節である。

地軸よ、地軸よ、お前のふところの中にこそは
かぎりなくも秘められている尊い宝！

『ルバイヤート』は、自然をうたった古典としてよく引用される。オマル・ハイヤームは一〇四〇年頃に生まれた天文・気象学者であり、数学書などの科学的業績も残している。この「地軸よ、地軸よ」という言葉がもつ当時の意味合いは、現在のわたしたちが想起する「地軸」とはおそらくことなっている。しかし、比喩概念としての地軸、わたしたちの生きているこの世界を世界たらしめているものへの憧憬は、よくあらわされているといえるのではないだろうか。

詩と科学の関連については、興味深いテーマであり、今後も折にふれて考察していけたらと考えています。